

芭蕉布の人間国宝・平良敏子と倉敷

―戦後復活した沖繩の名産・芭蕉布は、

民芸の街・倉敷にその足掛かりをとどめている―

川本武史

一、「日本に残された沖繩挺身隊の人々は…」

先の大戦で倉敷に動員されていた沖繩・女子挺身隊の一八名（倉紡岡山工場勤務）は、終戦によってその任務を終了したものの、彼女たちの故郷沖繩は大変な痛手をうけ、帰るべき町や家の様子はまったく分からず、家族の安否すらはっきりしていなかったのです。逐次沖繩の惨状が伝わるにつれ、当分の間沖繩に帰還することとは無理と判断、復旧するには少なくとも数年かかると考えられていたのです。隊員のうち約半数ほどは、内地の身寄りを頼って倉敷を離れたものの、残り六十名ほどは行き場を失い倉敷に取り残されました。そこで挺身

身隊を預かった立場の倉敷紡績社長の大原総一郎は、当時のお金で一人当たり二、三〇〇円の残高のある預金通帳を与え、残留の全員を岡山工場に採用する方針を固めたのです。一方沖繩の文化の高さを考慮して、倉敷市の郊外酒津（クラレ発祥の地）に「沖繩文化の娘村」を作り、沖繩文化を倉敷の地で再興することも考えていたのです。こうした社長の発案・温情に応えたのが挺身隊の副隊長の平良敏子さんを中心とする四人でした。敏子さんたちは、子供の頃から多少なりとも機織りの経験がありました。そこで総一郎は、かねてから知り合いの民芸の創始者・柳宗悦（白樺派の一人）に相談した結果、指導者として外村吉吉之助（倉敷民芸館初代館長）を招聘しました。かって外村氏は、静岡県の袋井でキリスト教会の牧師をしながら民芸の道（織物）を研究していたユニークな牧師でした。戦局の厳しさから福井県大野市に疎開し、終戦を迎えてこれからの生きる道を模索していました。そこへ師と仰ぐ柳宗悦からの推薦をうけたことから倉敷の地で、牧師を辞し民芸に専念する道を決意したのです。二十一年の正月のことでした。家族共々移住して、早速、備中北部の新見あたりまで足を延ばして、織機や糸車などを集めました。柳宗悦著「芭蕉布物語」をテキストとして、向市場（倉敷紡績の発祥の地、現在のアイビスクェヤ）の工場を拠点として織物の教室がスタートしました。

二、「沖繩帰還が決まった織女たち」

ところが、幸いなことに彼女たちの沖繩帰還が早まったのです。それは二十一年の十月のことでした。従って教室が本格的に機能したのは一年程度ということになりました。しかし、彼女たちにとっては短い期間とはいえ、正式に織物を学ぶ貴重な機会だったのです。平良敏子さんにしても、祖父が芭蕉布の生産に熱心で、幼い頃から機織りの音になじんではいたものの、外村師から学んだ織物に対する心構えと技術、加えて、自然の風土と人々の暮らしとの関わりを柳宗悦著の「芭蕉布物語」（昭和十七年出版）から学び、改めて郷土沖繩の芭蕉布の素晴らしさを再確認したのです。倉敷が与えた彼女たちへの「みやげ」と言えましょうか。とりわけ、駅頭に見送りに来た大原総一郎からの別れのはなむけとなった「故郷に帰ったら、是非とも沖繩の着物を守り育てて欲しい」ということは、平良敏子の脳裏に深く刻まれました。

三、「芭蕉布復活に取り組んだ平良敏子」

帰還したものの芭蕉布の復活とはほど遠い荒れ果てた故郷の現実が横たわっていました。一家の生活を支えるために彼女は、筆舌に尽くし難い苦労を味わったようです。けれども、暮らしの辛酸のなかでも、「何時の日か芭蕉布を蘇らしたい」という熱い思いは持ち続けていました。肝心の芭蕉はほぼ壊滅状態で、マラリア蚊を発生させる源と見なされ、刈りとられてしまい再生不可能な状態におかれていました。まさに絶望的な状況でしたが、倉敷駅頭での大原社長の饒別の言葉が、彼女の脳裏から離れることはなかったのです。まずは故郷大宜村喜如嘉の芭蕉の蘇生に力を注ぎ、織物としては、工芸技術として重要文化財の指定を受けるまでに高めていきました。

芭蕉布とは、芭蕉の茎の真ん中部分の繊維を裂いて糸（苧：「ちょ」または「そ」ともいう）とし、手織りで織りあげたものです。昔は沖繩の女性たち誰もが代々織りの技術を身につけていました。普段着にもよそいきにも、愛用されていた最も一般的な夏の衣装でした。現在では、沖繩の産地の中心は、大宜味村喜如嘉の里で、そこには背丈より少し高い糸芭蕉が繁茂しています。まさに彼女の故郷での努力の結晶とも言えましょう。彼女が得意とするのは芭蕉布の代表的な緋柄で、緋は織る人の感性によって変幻自在に表現できる可能性を秘めています。彼女は、緋の幅広い表現力と色彩感覚に、天才的な感性を発揮しました。そして「無形文化財」の指定を受けるにいたるまで精進したのです。今では喜如嘉の芭蕉布は地元の人々に広く受け入れられ、彼女の優れた指導力もあって沖繩での代表的な産物として、その名は日本全土に広く知られています。ちなみに「芭蕉布」の歌も多くの人達に歌われています。

小生の亡き母の実家は倉敷です。亡き父が出征（支那事変と大東亜戦争）の折り、幼なかつた私は母の故郷に疎開していましたので子供の頃から大原美術館や倉敷民芸館には出入りしていました。とくに外村吉之助氏から民芸館の機械機の前で説明を受けたことが記憶に残っています。夏には酒津の池（クラレの本社工場がある）で泳ぐことが日課でした。加えて母方の祖父と祖母は共に倉紡の社員でしたから大原家のこと（総

一郎と父親の孫三郎のこと)も良く知っていました。まだ小学生でしたので平良敏子さんのことは知りませんでした。改めて彼女の足跡が短期間ではあるが倉敷にあったことを知って深い感慨を覚えました。

四、かねてから麻機(静岡市の北部)の歴史を探っており、麻と芭蕉の違いはあるものの、同じ「苧」(靱皮)が繊維の原料ですから因縁めいたものを感じていました。平成八年の六月十三日に、麻機の有永(麻機小学校の一部)に図書館が併設されました。農家から提供(借用)された機などのほか農機具を、一部屋に集めて閲覧できるようにしてあります。昨今では岡部から織女の先生を招いて地元麻機小学校の生徒に年一回程度は教えているとのこと(麻機北の曾根峰三郎さん八十九才:「麻機村塾」所属)が主として指導しています)。かつての麻機は日本でも代表的な麻(「苧」和名からむし)の産地でした。だから、明治以降しばらくして、麻機村創設に際して作成した村誌の表紙を「浅畑村」から「麻機村」に変更したので(麻機北の細川さんが中心となって編纂した)。「民芸」とは、「暮らしに役立つ美しさ」を持った工芸品のことですが、これは、柳宗悦が、工芸品について自分の考え方を示すために作った造語で、「民衆的工芸」を意味しています。つまり普段使う日用品そのものが美しくありたいとの考えにもとづいています。職人の手にかかる「雑器」が、十分美しく映えた時代がかったの日本にはありません。器ではありませんが麻の織物もその一つと考えられます。一度東京の駒場にある日本民芸館や、倉敷の民芸館をゆっくり見学されることをお勧めします。郷土の誇りである芹沢鍬介氏(静岡市名誉市民)も民芸運動に参画した一人で、柳宗悦の影響を強く受けました。大原美術館の民芸コーナー(芹沢館)にもご注目ください。

★参考とした文献

「民芸と倉敷」金光章著(吉備人出版)

「へこたれない理想主義者」大原総一郎 井上太郎著(講談社)

「人間国宝」十八号(朝日新聞社)

「わしの眼は十年先が見える」城山三郎著(飛鳥新社)等